
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ

No.131

September 2023

2023 年度年次大会（10 月 28～29 日） 九州大学伊都キャンパス ハイブリッド形式で開催予定

前号のニューズレターでお知らせしたように、ロシア史研究会 2023 年度大会は 10 月 28 日（土）、29 日（日）の両日に、九州大学伊都キャンパスを会場とした、対面とオンライン（昨年より簡略化します）両方のハイブリッド開催を予定しております。新型コロナウイルスの感染状況や台風など、状況によりオンラインのみの開催に変更する可能性がありますので、メーリングリストでの事務局からの連絡とロシア史研究会ウェブサイトにおけるお知らせにご注意ください。プログラム確定版と報告要旨は 5 ページ以降をご覧ください。

出欠・総会委任状は原則として会員メーリングリストでお送りするフォームにて承ります。9 月下旬から 10 月上旬に配信予定です。なお、メールにアクセスできない会員の方には、従来通り、ハガキでの出欠確認・委任状送付をお願いいたします。

今年の会場付近には昼食をとれる場所がなく、売店もごく限られているため、会場参加予定の会員から、事務局が、事前にお弁当の注文を受け付けます。会員メーリングリスト（あるいはハガキ）でお送りする出欠フォームで、例年通りの各研究報告や懇親会の出欠とともに、お弁当の注文の有無についてもご記入いただきますよう、お願いいたします。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。非会員の方も、事前に事務局に申込みをし、会場で資料代 500 円をお支払いいただくことで、会場でご参加いただけます。オン

ラインでの参加につきましては、会員限定とさせていただきます。なお、大会に関する事務的な事項でのお問い合わせは、事務局濱本 mhamamoto[at]omu.ac.jp ([at]を@に換えてお使いください) 宛にお送りください。

<会場へのアクセス>

1. 九大伊都キャンパスまでの行きかた

● JR 九大学研都市駅から昭和バスを利用する場合

九大学研都市駅北口ロータリー左側にバス停留所があります。のりば案内が左手にあります。

下記のいずれかのご乗車ください。

九州大学線〔周船寺経由〕のりば①

九州大学線〔横浜西経由〕のりば②

(「西の浦行き」は九大には行きません。のりば③④は土日の運行はありません。)

「イーストゾーン」あるいは「九大ビックオレンジ前」バス停で降車してください。

便によって「イーストゾーン」に停車するものと停車しないものがあります。

● 博多駅・天神駅から西鉄バス「九大総合グランド行(急行:都市高速)」を利用する場合

博多駅から:博多駅博多口「博多駅前のりばA」

天神駅から:「天神ソラリアステージ前(2)(2Bのりば)」

「九大ビックオレンジ前」で降車してください。

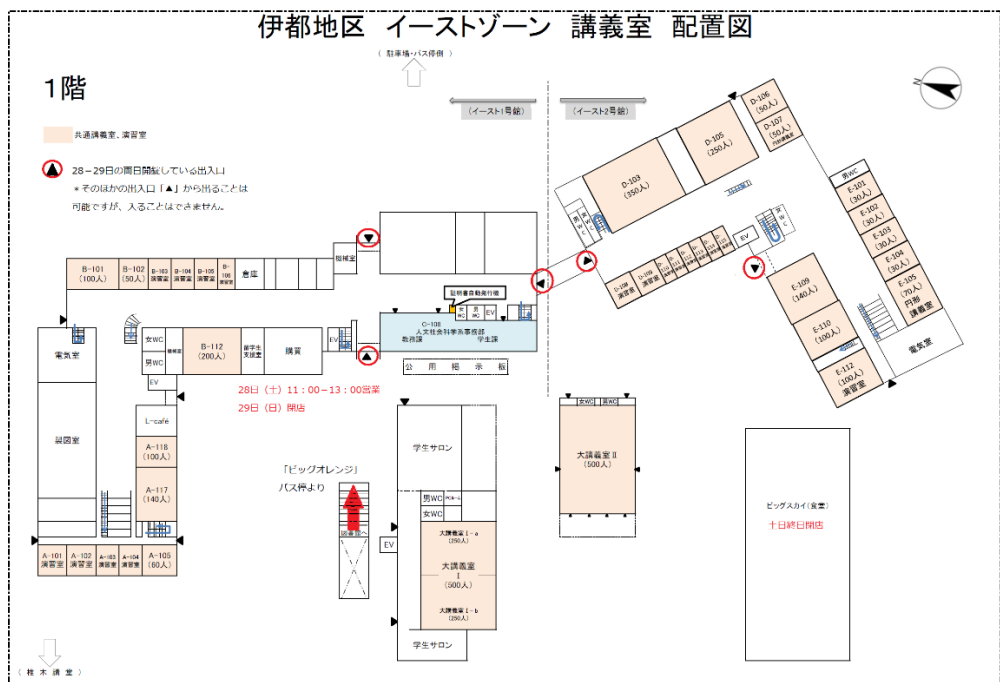
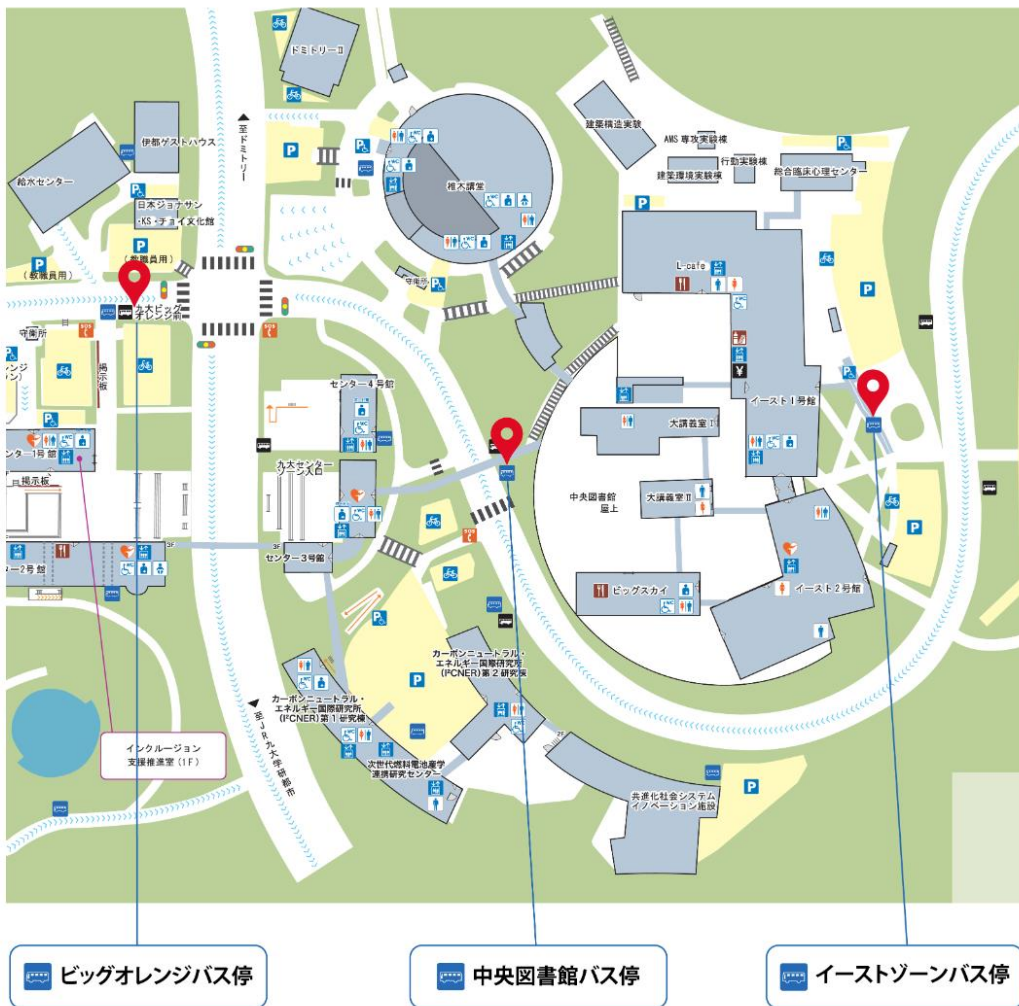
2. バス停留所から会場「イースト2号館」までの行きかた

● 「九大ビックオレンジ前」で降車した場合

いったん大学ゲートを出て、信号のある交差点をわたって坂を上ると左手に見えるのが中央図書館です。入口のエスカレータを上り切った正面の建物がイースト1号館、その右隣がイースト2号館です。

● 「イーストゾーン」で降車した場合

最寄りの建物がイースト1・2号館です。



3. 当日の学内施設の営業

● 10月28日(土)

【イーストゾーン】

生協イースト1号館店(購買):11:00~13:00

ビッグスカイ(食堂):閉店

【センターゾーン】

セブンイレブン:9:00~18:00

ビッグさんど(食堂):11:00~14:00、17:00~19:30

● 10月29日(日)

【イーストゾーン】

生協イースト1号館店(購買):閉店

ビッグスカイ(食堂):閉店

【センターゾーン】

セブンイレブン:10:00~17:00

ビッグさんど(食堂):11:00~14:00

- ◆ これ以外に昼食をとれる場所は最寄りにごいませんので、事前に事務局にお弁当を申し込むか、或いは、各自昼食の準備をお願いします。
- ◆ センターゾーンの食堂、コンビニはイースト2号館からは片道徒歩10分ほど要します。
- ◆ 生協イースト1号館店は小規模店舗で、土曜はお弁当・おにぎりの入荷はありません。
- ◆ イーストゾーン内に飲料の自動販売機がございます。

(開催校担当:佐藤正則)

2023 年度ロシア史研究会年次大会プログラム

10月28日(土)		
	A会場(イースト2号館 E-109)	B会場(イースト2号館 E-110)
11:00- 11:55	ベクトゥルスノフ ミルラン(北海道大学) 「ブカラ部族の台頭? : 1920年代後半のクルグズスタンにおける村ソヴィエト選挙の考察」 討論者: 奥田央(東京大学名誉教授) 司会: 鶴見太郎(東京大学)	夏陽開(東京大学・院) 「「探検」に見たシベリアへの地域認識の形成: 福島安正のシベリア横断を手がかりとして」 討論者: 兎内勇津流(北海道大学) 司会: シュラトフ ヤロスラブ(早稲田大学)
11:55- 13:30	昼休み (12:00~13:00 委員会)(イースト2号館 E-101)	
13:30- 16:00	共通論題A(イースト2号館 D-105) ロシア・ソ連の対外戦争と政治・外交 黛秋津(東京大学)「ロシア・オスマン戦争時におけるロシア=西欧外交: 18世紀後半を中心に」 石野裕子(国土館大学)「フィンランドにおける冬戦争の位置付け: 継続戦争との比較を中心に」 麻田雅文(岩手大学)「日本の復讐を恐れて: 第二次世界大戦後のソ連の対日政策の再検討」 討論者: 池本今日子(大東文化大学)、花田智之(防衛研究所) 司会: 宇山智彦(北海道大学)	
16:15- 17:45	総会	
18:00-	懇親会 於: 学内イタリアンレストラン「イトリートリ」 https://www.itri-ito.net/	

10月29日(日)		
	A会場(イースト2号館 E-109)	B会場(イースト2号館 E-110)
9:30-10:25	<p>林健太(北海道大学・院) 「ピョートル1世時代の出版業におけるロシア正教と国家：フェオファン・プロコポヴィチの人脈に着目して」 討論者：豊川浩一(明治大学) 司会：田中良英(宮城教育大学)</p>	<p>三栖大明(北海道大学・院) 「『自然』誌論争に見るブレジネフ期ソ連におけるエトノス理解の焦点」 討論者：渡邊日日(東京大学) 司会：立石洋子(同志社大学)</p>
	<p>10:30-12:30 パネル「近代ロシアはいつどのように形成されたのか？：揺れ動く近世ロシアの国家・社会・文化」 池本今日子(大東文化大学)「エリザヴェータ帝と正教会：政策と関係の諸相」 田中良英(宮城教育大学)「北方戦争再考：戦争を巡る国内外の反応」 鳥山祐介(東京大学)「エカテリーナ二世期の言語文化における「ロシア」」 討論者：宮野裕(岐阜聖徳学園大学) 吉田浩(岡山大学) 司会：豊川浩一(明治大学)</p>	<p>10:30-11:25 李暢(北海道大学・院) 「1920年代ハルビンにおける日露中市民の多文化共生：『濱江時報』を事例に」 討論者：伊賀上菜穂(中央大学) 司会：神長英輔(國學院大学)</p> <p>11:30-12:25 井上岳彦(人間文化研究機構/北海道大学) 「ハンボラマ・イロルトゥエフと外務省：アジア巡礼旅行(1900年—1901年)をめぐる」 討論者：左近幸村(九州大学) 司会：藤澤潤(神戸大学)</p>
12:30-13:30	昼休み	
13:30-16:00	<p>共通論題B(イースト2号館 D-105) 「亡命」再考 浜由樹子(静岡県立大学)「ユーラシア主義における「ウクライナ問題」：思想の循環史の観点から」 高橋沙奈美(九州大学)「ウクライナ・ディアスポラ教会：「異論派」の時代の自己認識」 齋藤宏文(九州工業大学)「ソ連遺伝学における知の漂流と継承：N・V・チモフェーエフ=レゾーフスキーとT・ドブジャンスキーの事例から」 討論者：中嶋毅(東京都立大学) 司会：半谷史郎(愛知県立大学)</p>	

報告要旨

【1日目 10月28日（土）】

自由論題報告①（11:00～11:55）

●ブカラ部族の台頭？：1920年代後半のクルグズスタンにおける村ソヴィエト選挙の考察

ベクトゥルスノフ ミルラン（北海道大学）

ソヴィエト政権が普通選挙を導入するまでクルグズ社会は半世紀以上に渡ってロシア帝国の支配下で村とヴォロスチ（郷）の長を選ぶことを経験してきた。しかし、帝政期と異なり、ソヴィエト権力下での選挙にいくつかの重要な変化が起きていた。その中でとりわけ重要だったのは利潤目的で労働者を雇用している人や非勤労所得で生活している人、いわゆるロシア農村のクラーク（富農）に相当する遊牧民たちが選挙権を剥奪されたことだった。つまり、法的な観点かれば「マナプ」と「バイ」と言われるクルグズ遊牧社会の富裕層はソヴィエト政権下になって伝統的な支配権を奪われたのである。本研究はマナプ層に対するソヴィエト政権の抑圧的な政策がクルグズ遊牧社会の既存の社会構造を大きく変化させたと主張する。特に、ソヴィエト政権の階級闘争の言説を活用したのは歴史的に有力な部族に支配され、従属的な立場にあった部族だった。「ブカラ」と言われるこのような部族はソヴィエト政権に対して自らのことを「搾取された」、「貧農階級」としてアピールし、階級闘争を名目に有力な部族の伝統的な権力にチャレンジしたのである。言い換えれば、ブカラ層の部族は村ソヴィエトへの選挙を通して有力な部族の権力独占を破って、従属的な立場から脱出しようとした。近年、ソヴィエト中央アジアに関して優れた研究が蓄積されてきた中で地域における民族共和国の建設や民族・文化政策など国家レベルでの動態をよりよく理解してきたものの、実際にソヴィエト権力が現地社会においていかに機能していたのかについてはまだ研究されていない。それで本研究は1920年代後半のソヴィエト・クルグズスタンの地方における村ソヴィエトへの選挙を分析し、遊牧民社会における初期ソヴィエト権力の実態を解明する。

●「探検」に見たシベリアへの地域認識の形成：福島安正のシベリア横断を手がかりとして

夏陽開（東京大学・院）

日清、日露戦争による日本のアジア大陸進出にともない、19世紀90年代以降日本社会において流布する外国に対する認識も変わりつつ、国全体の情報から外国の各地域に関する知識まで進み、全般的な認識から専門的な学知に発展した動向が見られる。そのうち、外国から受動的に伝わる情報ではなく日本人が軍事偵察や探検など形式で積極的に入手した知識は重要な役割を果たした。1892年から1893年にかけてシベリア地域を横断して当地の情報を記す福島安正はまさにそうした活動の重要な参加者であると考えられる。

「情報将校」とも言われた福島安正についての、特にユーラシア大陸各地における彼の情報活動や当時の日本のインテリジェンスシステムにおける彼の役割に関する研究はかなり蓄積された。その一方、探検の角度に基づいてその情報活動と当時の日本社会や海外への地域認識との接点についてはしかるべき注意はいまだに払われていないとも言える。シベリア鉄道の建設によって行われた軍事色が強いシベリア横断とはいえ、大いに新聞に取り上げられるうに東京地学協会など学会の報告の内容にもなるという近代的な「探検」の側面も否定しがたいと思われる。探検という地理的知識をつくる枠組みのもとで、福島が社会に伝えた情報はどんな地理的方法を使ったか、どんな地域像を作ったか、それらの問題点にはまだ考察する価値があると考えられる。

本報告は三つの部分から議論を展開する。第一部分は福島に関する公文書、福島と他の軍人や政治家との書簡、シベリア横断に関する主な新聞紙の記事に基づいて、情報活動であるシベリア横断が探検として大いに公衆の関心を集める背景を分析する。第二部分はシベリアに関する福島の著作や報告（一般大衆向けの書籍、少数の人向けの学会報告、軍人と政治家向けの軍事機密3種類を含む）を解読し、シベリア横断以前福島が伝えたユーラシア大陸他地域の情報と比較して福島が描いたシベリア像を紹介する。そのなか、福島は当時流行った人種など概念を使う一方、自分の理解を加えて独自の分析をした。第三部分はシベリアに関する福島の著作や報告とその時代シベリアを紹介する作品と比較し、福島のシベリア情報による社会のシベリア像への影響を分析する。

ロシア・ソ連の対外戦争と政治・外交

趣旨説明

宇山智彦（北海道大学）

2022年に始まったロシアのウクライナ侵略戦争は、ロシアがいまだに戦争を政治・外交の重要手段として位置づけていることを示した。また、この戦争に対する世界各国の対応は、今後の世界秩序全体の行方を考えるうえで重要な問題となっている。

今回の戦争はロシア・ソ連史、あるいはロシア・ソ連をめぐる国際関係史の中でどう位置づけられるのだろうか。そのことを考えるためにはロシア・ソ連の戦争と政治・外交の関係を再考することが不可欠である。この共通論題ではその一歩として、3つの異なる時代・地域を取り上げる。第一に、ロシア＝西欧関係と深く絡み合いつつ繰り返されたロシア帝国とオスマン帝国の戦争をめぐる外交を、1768-74年の戦争を中心に考察する。第二に、大国ロシア・ソ連に対して善戦した中小国の例として、第二次世界大戦期のフィンランドを取り上げ、同国の社会にとっての冬戦争・継続戦争の意味を考える。第三に、戦争に関わるロシア・ソ連側の対外認識の例として、第二次世界大戦後にスターリンが日本の「復讐」を抑止するために取った政策を、その後のアメリカとの対立も視野に入れて検討する。

安易な類推は禁物だが、ロシアの脅威認識と妄想的な世界観の混在、欧米への対抗と隣国の侵略の関係、戦争がウクライナ社会および国際秩序にもたらす変化といった今日的な問題を考えるうえで、これらの歴史的事例は、現在との違いも含めて参考になるだろう。また逆に、今日的な問題意識が歴史研究における問題発見や解釈の深化・多様化に貢献することも期待できる。

●ロシア・オスマン戦争時におけるロシア＝西欧外交：18世紀後半を中心に

黛秋津（東京大学）

ロシア帝国とオスマン帝国は、16世紀以来、幾度となく戦いを繰り返したが、オスマン帝国のヨーロッパに対する優位が解消された18世紀初頭以降のロシア・オスマン戦争においては、西欧諸国の関与が増大し、勢力拡大するロシアに対し、西欧諸国がオスマン帝国を支える構図が次第に定着していった。すなわち、ロシアとオスマン帝国と西欧諸国が一つの国際システムを形成してゆくなかで、オスマン帝国はロシアと西欧の狭間に置かれ、ロシア・オスマン戦争は、西欧諸国とロシアの戦争という一面を持つようになっていった。様々な条件が異なるため、安易な比較は慎むべきかもしれないが、オ

スマン帝国支配下で異教徒に「虐げられている」バルカン等の正教徒の保護を理由に、ビザンツ帝国の後継者であり正教との保護者たるロシアが「本来支配すべき」オスマン帝国の中核領域への進出を試みるロシアと、オスマン帝国への影響を強めロシアの進出を押しとどめようとする西欧諸国の動きの中に、今日の状況との類似性を見ることはできないだろうか。

18世紀後半以降、ロシア・オスマン戦争には西欧諸国が積極的に関与するようになり、戦闘と並行して、ロシアと西欧諸国とオスマン帝国の三者間で、活発な外交が展開されていた。その中では、上述のような、ロシアに対抗して西欧諸国がオスマン帝国を支えるという単純な構図ではなく、西欧諸国の間で対応が分かれることがあり、ロシアと一部の西欧諸国が合意して、ある領土や権利を分け合おうとするケースもあった。他にも、戦争終結の条件が西欧諸国の強い影響の下で決められ、和平が結ばれることがしばしば見られた。

本報告では、1768～1774年のロシア・オスマン戦争を例として取り上げ、戦争中のロシアと西欧諸国、とりわけハプスブルク帝国とプロイセンとの関係を軸にその外交を跡付ける。具体的には、開戦して間もなく明らかになったロシアの圧倒的な優勢とこれに対する西欧諸国の反応、ロシア内で早々に現れた和平案とこれをめぐる西欧諸国とのやり取り、ロシア軍の占領地域拡大に伴い強まる西欧諸国による和平条約締結への圧力と和平交渉への関与（交渉の仲介者としてのハプスブルク帝国とプロイセン）、同時期に現れたポーランド分割の動きとの関わり、一方で、ハプスブルク＝オスマン帝国間に見られた外交合意、などの点について検討し、戦争開始から和平に至るまでの、ロシア帝国の西欧諸国との向き合い方を考察する。

この1768年の戦争が主たるテーマであるが、比較のため、19世紀のロシア・オスマン戦争の事例にも適宜言及するつもりである。

●フィンランドにおける冬戦争の位置付け：継続戦争との比較を中心に

石野裕子（国土舘大学）

本報告では、第二次世界大戦期にフィンランドがソ連と2度戦った戦争のうち、第一次対ソ戦争である冬戦争（talvisota 1939.11-1940.3）がフィンランド社会でどのように受け止められ、位置付けられていったのかを、第二次対ソ戦争である継続戦争（jatkosota 1941.6-1944.9）の受容との比較を通して明らかにすることが目的である。

フィンランドにとって冬戦争は敗北した戦争だったにもかかわらず、ある種の「栄光的過去」を有する戦争である。圧倒的なソ連軍の前に、軍事力が不足しているフィンランド軍が一丸となって国土を防衛したという戦争認識が戦後も続いた。そのことは「冬戦争の驚異」、あるいは「栄光の105日」という用語からも明らかである。冬戦争が105日間戦われたことから、冬戦争は「105日」または「栄光の105日」と表現されていっ

た。また、内戦から続いていたフィンランド国民の分裂を修復する作用をもたらしたとされる。1917年12月6日にフィンランドはロシアから独立を宣言したものの、翌年1月に内戦が勃発し、独立直後に国民同士が殺し合う惨事となった。その辛い過去を乗り越え、一致団結して敵国に立ち向かったのが冬戦争であるという認識が共有されていった。つまり、フィンランドのナショナリズムが強化された戦争としても捉えられる。しかし、他方で内戦の団結には例外が存在した。内戦後に亡命し、フィンランド共産党をモスクワで立ち上げ、冬戦争時にはソ連の傀儡政権（通称 テリヨキ政権）を担ったフィンランド共産主義者は、その団結にはもちろん加わっておらず、その扱いは留意すべきである。また、多くの死傷者、領土割譲、それに伴う住民の退去、多額の賠償金などの代償は継続戦争へと引き継がれていったのである。

本報告では、以上のような歴史的背景を踏まえた上で、フィンランド社会で冬戦争がどのように位置付けられていったのかを新聞、雑誌、メディアなどの表象に注目し、継続戦争との比較を通して明らかにする。また、事例として、戦争、兵士の表象だけではなく、ロッタ・スヴァルドにも注目したい。ロッタ・スヴァルドは内戦期に白衛隊の後方支援をする女性団体として誕生し、戦間期にフィンランド最大の女性奉仕団体として成長、冬戦争、継続戦争時には国防組織の役割を担った団体である。同団体の表象にも注目することで、フィンランド社会における冬戦争の位置付けについて多角的に論じたい。

●日本の復讐を恐れて：第二次世界大戦後のソ連の対日政策の再検討

麻田雅文（岩手大学）

日ソ戦争で少なくない犠牲を払ったソ連国民に、スターリンは戦争を正当化するため、1945年9月2日、ソ連国民に向けてラジオで演説した。そのなかで、「40年間、われわれ古い世代のものはこの日を待っていた」と、日露戦争の復讐を果たしたことを誇った。過去の戦争の復讐を掲げ、日ソ戦争を正当化したスターリンだが、日本の復讐も人一倍恐れていた。スターリンは、ドイツや日本がソ連に復讐するという考えにとりつかれていたことは、先行研究でも指摘されている。

しかし、それが具体的に、どのような戦後のソ連の対日政策に結実したのかは、必ずしも明らかにはなっていない。そこで本論は、冷戦の始まりとしてこの時期を見るのではなく、日独の対ソ報復を防ぐという、抑止が政策の核心であったという仮説のもと、この時期のソ連の対日政策を再検討したい。その際には、ソ連の戦後の対日政策にも大きな影響を与えた、対独政策も並行して検討する。そして、アメリカと連携しての抑止政策の構築に失敗したことが、ソ連が単独で日本を抑止するための政策に転化し、ひいてはアメリカとの対立の誘因となったことを論じたい。

では、日本の復讐を防ぐにはどうすれば良いのか。スターリンは5つの手を打つ。第

一に旧日本軍の将校たちの逮捕、第二に対日同盟網の構築、第三に艦艇など兵器の没収、第四に南樺太と千島列島の併合、第五にシベリア抑留である。本論ではこれらを各節ごとに見てゆく。

【2日目 10月29日（日）】

自由論題報告③（9:30～10:25）

●ピョートル1世時代の出版業におけるロシア正教と国家：フェオファン・プロコポヴィチの人脈に着目して

林健太（北海道大学・院）

18世紀初頭のピョートル1世の近代化は、モスクワ公国時代の既存の土台の上に、ウクライナ・ポーランドのカトリック系の人々をはじめ、オランダや征服したばかりのバルト地域のプロテスタント系の人々がもたらす多様な新しい技術・思想を植え付けられたものである。ロシアの出版業もまた、17世紀までロシア正教会の一機関であったモスクワ印刷所を基礎としつつも、キエフ・モギラアカデミー出身の聖職者、ピョートル1世が西欧に派遣した留学生、新たに併合されたバルト地域の職人などを迎えて発展した。

18世紀ロシア出版史を著したゲーリー・マーカーは、この時代の出版業を「皇帝の命令方式」とし、ピョートル1世の命令のもと、軍事・海事の教練書や法令、算術や天文学の学術書といった、非宗教・非正教的な書物の出版が盛んにおこなわれると同時に、宗教的な書物が依然売れている状況は大きく変化しなかったと指摘している。

ピョートル1世時代において、教会を国家に服従させる機関となったのが至聖宗務院であるが、本報告ではその制度を規定した『宗務規則 *духовный регламент*』を作成したフェオファン・プロコポヴィチがどのように出版業に関与したのかと合わせて、当時の正教会関係者たちが、不特定多数の人々が読むことができる出版物において、どのような論戦や人間関係を展開したかを検討する。この検討を通して、世俗化したとされる出版業が、それぞれの立場から正教と国家の関係を主張する場としても機能していたことを論じる。

本報告ではまず、ピョートル1世の改革の喧伝者といえるフェオファン・プロコポヴィチの来歴を概観する。彼がキエフのモギラ・アカデミーで学び、グレコ・カトリックに改宗しローマで学んだ経歴を確認したい。ついで、プロコポヴィチの出版物を読み解くことで、彼の出版物上での宗教と国家の関係、そして敵対するラテン派の聖職者たちや古儀式派に対する彼の姿勢を明らかにする。最後に、この人物と出版業に関与した校正者、聖職者や官僚たちとの関係を分析する。以上の検討をつうじて、ピョートル1世時代の出版業が、ロシア正教会内の聖職者たちの間の、正教と国家との関係を巡る複雑な論争の舞台でもあったことを明らかにしたい。

● 『自然』誌論争に見るブレジネフ期ソ連におけるエトノス理解の焦点

三栖大明 (北海道大学・院)

1970年の『自然 (Природа)』誌に2回にわたって掲載されたL. N. グミリョフの論文「エトノス生成とエトノス圏 (Этногенез и этносфера)」は、翌71年にかけてエトノス (民族) をテーマとした論争を呼び起こした。1960年代後半から「景観とエトノス」を始めとする諸論文を通じて、主著『エトノス生成と地球の生物圏』の原型となる独自のエトノス論をグミリョフは既に展開していたが、これらの論文は当初限られた読者の間で読まれるに過ぎなかった。こうした中、当時の主要な科学誌であった『自然』への論文掲載は、それまで余り知られることのなかったグミリョフのエトノス論が初めて多くの眼に触れる機会となり、結果としてソ連民族学研究所の所長 Yu. V. プロムレイを始めとする学者からの反論が寄せられた。この出来事はソ連末期まで続くグミリョフ批判の開始点となる。

従来の研究では、この論争はグミリョフの伝記上の出来事として語られるに留まり、議論された内容よりも論争の経緯に焦点が当てられてきた。内容についても、エトノスを生物学的範疇と社会的範疇のどちらに分類するのかが議論的であったとされるばかりで、論争そのものの詳しい検討は行われていない。本来、この論争にはプロムレイら民族学者の他、地理学、考古学などの専門家も参加しており、彼らはグミリョフの議論を批評しつつそれぞれの立場からエトノスについての持論を述べている。グミリョフ論文を契機とする『自然』誌上での論争は、当時のソ連において民族を考える上で何が問題とされたのかを理解する上で有意な史料であると考えられる。

発表者は、従来検証されることのなかった論争の具体的内容の分析を通じて、この議論の性質に迫る。これに際して、この論争には従来見過ごされていたエトノス定義を巡る立場の問題や、ソヴィエト人への「諸民族の接近と融合」についての歴史的文脈が存在するという仮定から論争内容を検証すると共に、多義的な解釈の余地を持つグミリョフ論文のどの要素に各論者がアクセントを置いて発言しているのかに注目する。以上のアプローチによって、ブレジネフ期ソ連における民族理解の争点が明らかになるだろう。

●1920年代ハルビンにおける日露中市民の多文化共生：『濱江時報』を事例に

李暢（北海道大学・院）

「東方の小パリ」と称されるハルビンはかつて東北アジアの経済的中心であり、東西文化コミュニケーションの交差点に位置した。多方を結ぶ位置を占めたハルビンの誕生は鉄道と深い繋がりがあった。中東鉄道を介して、人々は世界各地からハルビンに到来し、様々な国と地域から各自の文化をハルビンに導入し、ハルビンに独特な風貌を与えた。その中、ロシア人、中国人と日本人の進出はとりわけハルビンに影響を与えていた。彼らはまちづくりに著しく活躍していただけでなく、同じ都市空間に住みながら、相互に影響を与え、多彩でコスモポリタンな都市生活を織り出した。ディビッド・ウルフの『ハルビン駅へ：日露中・交錯するロシア満洲の近代史』は、19世紀末期から1910年代までの時期を中心に、ハルビンのロシア人社会の独自性を活写し、帝政ロシアの崩壊後、ハルビンがロシア文化の継続できる一隅になったことを論じ、「東西融合の世界文化の場」であったハルビンのコスモポリタニズムを描出している⁽¹⁾。しかし、1920年代に入ると、五四運動を契機とする中国のナショナリズムの台頭、満洲における日露の勢力圏競争、白系ロシア人とソヴィエト勢力の確執など、多民族の共生だけでなく各民族の内部にも分断をもたらす事態が出現する。このような事態を背景に、かつてのハルビンのコスモポリタニズムは損なわれてしまったのだろうか、そして市民の日常生活はどの程度変化したのだろうか。これが本報告の問いである。

本報告は、ハルビンの地元紙に見られる日露中の庶民社会に焦点を当て、1920年代のハルビンを舞台とした多文化かつ多民族の空間において異文化が交錯する状況を考察する。日常レベルでの人々の交錯に着目して、外交環境が緊張をはらむ中で市民のコミュニケーションがどのように成り立ち、展開していたのかを描出する。そこに描かれる穏やかな日常は、従来の研究で強調されてきた日露中間の一触即発の緊張感と鮮明な対比をなし、ハルビンの多民族かつ多文化の環境を再考する新たな見方を提供する。結論を先取りすれば、1920年代の日露中市民の間には、ある種のコスモポリタニズムが持続していたのであり、この見立ては、ハルビン社会史と日露中文化交流史に新たな光を当てることになる。

参考文献

⁽¹⁾ ディビッド・ウルフ(半谷史郎訳)『ハルビン駅へ：日露中・交錯するロシア満洲の近代史』講談社、2014年

●ハンボラマ・イロルトウエフと外務省：アジア巡礼旅行（1900年—1901年）をめぐって

井上岳彦（人間文化研究機構/北海道大学）

本報告の目的は、ロシア外務省が国内チベット仏教徒の国外活動にいかなる姿勢をとったのか、その背景を含めて、明らかにすることである。この研究は、ロシア帝国内のチベット仏教徒（主にカルムイク人、ブリヤート人）がダライラマ 13 世の世界発信^①に共鳴し、帝国と「チベット仏教世界」の接近を図った運動を解明する研究の一部として位置づけられる。

具体的に考察する対象は、ハンボラマ・イロルトウエフのアジア巡礼旅行（1900年—1901年）についてである。東シベリア仏教僧侶団の長であるバンディド・ハンボラマの職にあった、ブリヤート人チョインジン・イロルトウエフ（生 1843 年—没 1918 年、在職 1893 年—1911 年）は、1900 年 7 月にザバイカル州を出発し、オデーサ経由で、イギリス支配下のインド、セイロンを巡り、さらにシャムを訪ね、最終的にモンゴルを目指す旅に出た。イロルトウエフは、異国の地で、何を見てどのような処遇を受けたのか。また、この巡礼旅行は、ダライラマ 13 世の側近ブリヤート人僧侶アグヴァン・ドルジエフ（生 1853 年—没 1938 年）がヤルタでニコライ 2 世に謁見し、その結果を伝えるためラサに戻る旅行と時期が重なることにも注目する必要がある。

分析する史料は、（本来ならばロシア帝国外交文書館 АВПРИ に保管される史料を利用すべきだが、残念ながら未調査のため）公刊された外交文書史料である。先行研究は、E.A. Белов が責任編集した史料集^②をはじめとするロシア・チベット関係史料集や、ロシア・モンゴル関係、ロシア・中国関係の史料集を主に利用してきた。本報告では、それらに加えて、ロシア・インド関係やロシア・シャム関係の史料集を利用し、現地駐在外交官の報告を中心に、イロルトウエフのアジア巡礼旅行を検証する。従来の研究は、狭義のチベット仏教徒にのみ焦点を当ててきたといえよう。しかし、近年の研究によって、危機に瀕するチベットにおいて、ダライラマ 13 世とその周辺の人々がチベット仏教の枠を越えて、仏教徒全体、そして仏教に関心をもつ広範な人々との関係の構築を進めていた可能性が明らかになりつつあり、イロルトウエフのアジア巡礼旅行もその一環ではないかと考えられる。

参考文献

^① Yumiko Ishihama, Makoto Tachibana, Ryosuke Kobayashi, and Takehiko Inoue, eds., *The Resurgence of "Buddhist Government": Tibetan-Mongolian Relations in the Modern World*. Osaka: Union Press, 2019.

^② E.A. Белов, отв. ред., *Россия и Тибет: сборник русских архивных документов 1900-1914*.

Москва: «Восточная литература», 2005.

近代ロシアはいつどのように形成されたのか？

揺れ動く近世ロシアの国家・社会・文化

趣旨説明

豊川浩一 (明治大学)

18世紀初頭から19世紀前半までのいわゆる「長い18世紀」のロシアを考える。ヨーロッパの列強となる近代ロシアの前提となるこの近世ロシアの国家・社会・文化に関する基本的構造を詳らかにし、そのうえでそれらがどのように揺れ動いて形成され、さらには修正されていったのか、その過程の重要な鍵となるいくつかの要素を提示し、それを検討することがテーマである。

この時期のロシアはヨーロッパとの対立ではなく、ヨーロッパの国であることが追求された時代であった。ピョートル一世以来、ロシアはヨーロッパに目を向けた。彼に続く6人の皇帝たちの時代にはその動きに一貫性は見られないものの、エカチェリーナ二世はヨーロッパへの一層の志向性を明確にした。新法典編纂委員会への訓令第1章第6条では、「ロシアはヨーロッパの国家である」と高らかにうたわれている。しかし、ロシア政府が新しい制度の設立に躍起となる一方で、伝統に固執して生きようとする社会はそれに激しく抵抗することになる。プガチョーフ叛乱はその動きが頂点に達した出来事である。

昨年2月に始まったウクライナ侵攻以来、ロシアがその独自性を追求しているだけでなく、世界もロシア的なるものとは何かを見出そうとしているようにみえる。ここでは、あえて、ロシア的なるものを求める側面ではなく、ヨーロッパ的なるもの（あるいはヨーロッパ）を求める側面に注目する。もちろん、時代や分野によりロシアらしさが追求される側面があり、また、ヨーロッパを求める中にもロシア的な特徴もあるはずである。そのような点も検討課題となりうる。

●エリザヴェータ帝と正教会：政策と関係の諸相

池本今日子 (大東文化大学)

ヨーロッパ化改革の中で、ロシアの文化的伝統はどのように扱われたか。その際、正教会は伝統の体現者であった。アレクサンドル1世はロシアらしさにも正教会にも無関心で、むしろ蔑ろにしたといえる。彼は宗教の多様性を重視しようとしたが、挫折した。ここでは、エリザヴェータ帝 (在位 1741~61) を取り上げる。

スモーリヌイ大聖堂はバロックの聖堂だが、5つの玉葱頭という伝統的要素が取り入れられている。エリザヴェータはそれを命じ、また、伝統とかけ離れた教会内部の装飾を一掃させ、アルタリの位置が伝統と異なる教会の建て直しを命じた。聖職者を尊重し、自分に対する宣誓を一時拒否した聖職者も重用した。特定の修道院に特権を与えただけでなく、教会の所領を管理する経済参議会を廃止して、教会に所領の管理を戻した。

教会重視策の理由は、信心深さと結びつけられることも多いが、アンナ帝とイヴァン6世の時代のいわゆる「ドイツ人支配」との相違を明確化し伝統に回帰することが正統性の根拠として必要であったと論じられる。あるいは、エリザヴェータが聖職者と民に宗教生活の規律を守らせることで教会の権威を高めようとしたことが注目される。ウォートマンは、彼女は巡礼と厳しく齋を守ることによりロシア人であることを示す一方で、あくまでヨーロッパの君主として振る舞ったと論じる。ヨーロッパが基本であったことは、スモーリヌイ大聖堂がバロックの建築物であることにも反映されている。

報告では、彼女が正教会をどのように尊重したか、また、その理由を考察する。彼女の正教会に対する姿勢は、信心深さだけが理由ではないとしても、政策や正統性の根拠のためだけでもなさそうである。即位声明、戴冠式、教会の政治的説教、宗教生活の規律と特に教会領に関わる政策、ロストフとヤロスラヴリの府主教アルセニイによる宗務院廃止提案など、高位聖職者と彼女との関わりを中心にとりあげ、全体像をつかむことを試みる予定である。

●北方戦争再考——戦争を巡る国内外の反応

田中良英（宮城教育大学）

「歴史修正主義」の勢いに象徴されるように、自説の正当化のために、歴史的過去の認識・評価を政治的に利用する傾向が近年著しい。時にそれは、人類史における戦争の普遍性を論拠とするなど、歴史的過去を全て均一のものとして捉えるような態度を示唆するが、このような志向に対抗する上では、現在からの遡及的な判断基準を適用するのではなく、まずは同時代的な価値観・文脈を改めて意識しつつ、それに基づいて、個々の事実を精査・評価していく必要があるだろう。

1700～21年の北方戦争（北欧史の文脈では「大北方戦争」）は、ロシア関連では珍しく、総じて日本の高等学校教科書でも取り上げられる有名な出来事であり、ロシア一国史の文脈ではピョートル改革の成否を決定付けた大きな転機としても注目されるが、国際関係的に見れば、必ずしもロシアとスウェーデンとの二国間戦争ではない。もともと15世紀末から続くバルト海の覇権を巡る諸勢力間の競合関係からすると、ロシア国家はあくまでアクターの一つにすぎず、それも17世紀半ばの時点では、依然むしろ劣位な存在に留まっていたと言える。そして、実際に17世紀末のピョートル政府の外交的な動きを追うと、最終的に北方同盟を締結したデンマーク王国、ザクセン=ポーラ

ンド王国に留まらず、神聖ローマ帝国、ブランデンブルク=プロイセン、オスマン帝国など諸勢力に対する執拗なまでの配慮の形跡と、オスマン帝国との戦闘再開の可能性を孕んだ状態での単独での開戦を回避しようとする政策的態度とが明瞭に見て取れる。

また戦争という行為がいかなる評価を受けていたのか、こうした国外諸勢力との間の観点に加え、国内住民との関係性からも検討する必要がある。もともと国家と君主との境界線が曖昧であるとともに、移動や通信のインフラが機械化以降とは異なる当時において、対外戦争が有する物理的・心理的インパクトは住民の所属身分や居住地によっても大きく異なっていたことが予想される。本報告では、北方戦争の準備や開始に際してのピョートル政府の具体的な言説を改めて確認しつつ、それらに対する国内外の反応を探ることで、ピョートル改革期のロシア国家とヨーロッパ世界との相互のまなざしを追究するとともに、近世的な国家・社会状況における戦争の意味を再検討することを意図する。

●エカテリーナ二世期の言語文化における「ロシア」

鳥山祐介（東京大学）

18世紀、特にエカテリーナ二世の時代がロシアにおいて西欧化に育まれた文化が花開いた時代であったことはよく知られている。一方で（ピョートル以前の）ロシア史やロシア語という表現手段への関心といった西欧文化と異質な「ロシア的」要素はこの時代の文化でも大きな位置を占めており、そのような側面が強調されることもある。ただし、当時のロシア文化の中でそうした要素が担っていた意味を考える上では、19世紀以降とは別の文脈を考慮する必要がある。本報告では、翻訳出版や文芸創作といったエカテリーナ期の文化でそうした要素が担った機能をヨーロッパの全体の文化状況を視野に入れながら概観し、日本語の知的蓄積の中でこの時代のロシア文化についての理解がアップデートされることへの一助としたい。

《亡命》再考

趣旨説明

半谷史郎（愛知県立大学）

ロシアで今また「亡命」が現実味を持って語られている。

ロシアからの出国・亡命は、プーチン政権の言論統制を嫌った知識人の動きが 2010 年代から増加傾向にあったが、22 年 2 月にウクライナ侵攻が始まると、一気に拡大した。また 22 年 9 月に 30 万人規模の動員令が発表されると、一般の若い世代にも飛び火し、徴兵を逃れようと近隣諸国に殺到。その規模は、数十万規模に達したと言われる。23 年 7 月の報道では、侵攻後の国外移住者は 100 万人にのぼり 1917 年のロシア革命に匹敵する規模になったという（『毎日新聞』2023 年 7 月 25 日）。一方、ロシアに侵攻されたウクライナでは、多くの国民が戦火を避けて国外に逃れ、難民となっている。国連難民高等弁務官事務所によると、その数は 2023 年はじめで 800 万人にのぼる。

このようにウクライナ侵攻が多数の出国・亡命・難民を生みだしている現状に鑑み、本年度の共通論題 B は《「亡命」再考》と題して、20 世紀のソ連時代におきた数々の「亡命」を今一度検討する。「歴史とは、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話である」とのカーの言葉を噛みしめながら、20 世紀の「亡命」数々を再び検討の俎上に載せてみたい。

本セッションは、1920 年代のユーラシア主義者のウクライナ像を検討する浜報告、ドイツとアメリカに亡命した二人の遺伝学者の足跡を追う齋藤報告、20 世紀後半のウクライナ亡命教会の自己認識を探る高橋報告の三報告で構成される。扱う時期や対象が異なる三者三様の報告だが、ロシア発の亡命が世界に与えた影響や、亡命した人が後々本国とどのような関係を持つか（帰国する／しない、遺産が本国に戻る／戻らない、など）といった点を中心に「亡命」の具体的なありようを考えてみたい。

なおコメンテーターは、中嶋毅氏にお願いした。ご専門のハルビンの亡命ロシア人社会についての知見を活かして、活潑な議論を引き出してもらえると期待している。

●ユーラシア主義における「ウクライナ問題」：思想の循環史の観点から

浜由樹子（静岡県立大学）

グローバル・ヒストリーや比較史の分野で常に刺激的な問題提起で知られるプラゼンジット・ドアラは、海洋の水の循環メタファーを用いて、「歴史の循環」を捉えようとする。河川のような単線的モデルとは異なり、海洋の水のように、A という場所で

ある形をとって生まれた「歴史（ここでは思想）」が、BやCへと流れ、それぞれの地でローカルな要因の影響を受けて、しばしばオリジナルとは異なるかたちでAに再出現する。ドアラの「循環モデル」はかならずしも元の場所に戻ることを意味しないが、20世紀のロシア亡命者の思想には「循環史」として捉えられる面が確かにある。

今日的な問題意識から見直せば、ユーラシア主義者とウクライナ人亡命者の間にあった論争の構図は、ソ連邦の誕生と消滅を挟んで本国に流入した、思想の還流だったと解釈することができるかも知れない。

古典的ユーラシア主義においてウクライナをどう位置付けるかは難問であった。ユーラシア主義の中心メンバーには、ウクライナにバックグラウンドを持つ者が実は多い。また、20世紀初頭までの知的潮流として「東スラヴ一体性論」が浸透していたこともあり、彼らはウクライナとロシアの文化的分裂を「政治的フィクション」とみなし、ウクライナを「ユーラシア」から切り離すことに総じて否定的であった。

これに対して、ウクライナ亡命者コミュニティからは、主に二つのタイプの反応があらわれた。一つは、ウクライナ（文化）は中世には既にロシアと分化した別の民族（文化）だという反論であり、もう一つは、ロシアが「ユーラシア」であるなら、ウクライナは「ヨーロッパ」に属するので、両者が別の道を歩むのは当然だという主張であった。

他方、亡命者間の論争とは別に、本国ではソ連邦の形成という別の事態が進行中であった。帝政末期の思想界は、その認識や発想枠組ごと亡命者と共に国外に移り、そこで「冷凍保存」されたともいえる。

これが「解凍」されて戻ってくるのは、ソ連邦が解体され、新しい国家として両国がアイデンティティを模索する過程においてである。新生ロシアにも、新生ウクライナにも、亡命者の思想がそれぞれのルートで持ち込まれ、再発見された。

1990年代のロシアとウクライナで、まったく異なる条件下でありながら、1920年代ときわめて良く似た構図でアイデンティティ論争が再出現したことを説明するには、時代、空間、個人の経験を超えた思想の「循環史」が一つの手がかりになるだろう。

●ウクライナ・ディアスポラ教会：「異論派」の時代の自己認識

高橋沙奈美（九州大学）

ウクライナ人ディアスポラとウクライナ民族教会の問題を考える時、もっとも活発な動きが認められるのが第二次世界大戦後の北米大陸である。1941年に、ロシア正教会はスターリンの宥和政策を受け入れ、いわば「官製教会」としてソ連宗教政策の一翼を担う組織へと変貌した。ドイツ占領下のウクライナでは、ポーランド正教会の支援を受けて創設されたウクライナ独立正教会（UAOC）と、ロシアとのつながりを保ちつつウ

クライナの自治を追求することを目標とした集団がいた。彼らはウクライナ民族の独立を目指して、あるいは組織の存続のためにドイツと協力せざるを得なかった。そのため戦後、これら2つの教会に加わった聖職者たちは軒並み亡命するか、逮捕され、本国での活動基盤を失った。また、ウクライナに併合されたハリチナでは、ギリシア・カトリック教会が盛んであったが、これもまた1946年のリヴィウ公会（教会会議）によってロシア正教会に「再統合」された。こうして戦後のウクライナではロシア正教会のみが合法的に活動することを許され、ウクライナの民族派教会を支持する聖職者や信者らは、亡命あるいは地下に沈潜することによってのみ生き延びた。

これまでのウクライナ教会研究ではこれらの亡命教会について十分な整理がされてきたとは言い難い。概説的には、ウクライナ亡命教会は反ソ的ディシデント集団として理解されてきた。しかし、教会の自治／独立問題に関する限り、それは政治的・民族的な性格を持つばかりでなく、教会法にかかわる教会外交の側面も有する。ロシア正教会がウクライナを管轄下に置くことは1686年にコンスタンティノープル総主教座（世界総主教座）によって認可されていたはずであったが、その正当性は1924年にポーランド正教会が独立の承認を勝ち取ったときに疑義に付された。一方で、ウクライナ亡命教会が世界総主教から承認を得るのはソ連解体後の1995年を待たなくてはならなかった。

そのことの背景には、共産主義への対抗、キリスト教的価値観、ナショナリズム復興という点でウクライナ亡命教会は在外ロシア正教会や異論派とも共通点を持ちえたため、ウクライナ・ナショナリズムという点で差異化を図るほかなかったのである。本報告では、ソ連異論派の活動が盛んであった1960-80年代にウクライナ亡命教会がどのような自己認識を持っていたのかについて検討する。

●ソ連遺伝学における知の漂流と継承：N・V・チモフェーエフ=レソーフスキーとT・ドブジャンスキーの事例から

齋藤宏文（九州工業大学）

複雑な事情により長期に渡り祖国を離れる選択をした科学者が、滞留先での研究活動や言動を通して、出身国と滞在国の科学に与えた影響、ひいては世界全体の科学の営為に残した結果にはどのようなものがあったのだろうか。本報告ではこの問いをソ連出身の二人の遺伝学者N・V・チモフェーエフ=レソーフスキーとT・ドブジャンスキーの事例に基づき考察する。国家運営の手段として科学に全面的な信を置くことを理念に掲げたソ連では、建前上は自国の科学者に対する十全な研究支援と身体的安全が保証されているように見えた。しかしながら、自国の学術の行く末に見切りをつけて国外への脱出を選択したソ連の優れた科学者も少なからず存在したし、その一方で、海外での遊学生生活を享受した後に（必ずしも本人の意に沿う選択だったとは限らないとはいえ）帰国し、自国の科学の発展に身を奉じた科学者もいた。外国での研究生活を経験したソ連の科学

者が最終的にどのような判断に従って帰国を決断したか／そうしなかったのかの問題について、体系的な議論をするためには未だ先駆的な論稿⁽⁵⁾が出されている段階に留まるが、参照すべき個々の事例の詳しい分析は多く存在する。本報告で取り上げる二人の遺伝学者のケースもそうした事例を提供するものである。

1900年にモスクワで生まれたチモフェーエフ=レゾーフスキーは、モスクワ大学で学んだ後、1925年からドイツのカイザー・ヴィルヘルム研究所に移り、生物物理学の研究に約20年間従事した。ところが、1945年ベルリン陥落後に対独協力者の疑いをかけられソ連軍により逮捕され、ロシアへの強制移送を経て1956年に釈放されるまでウラルで収容生活を強いられる⁽¹⁾⁽²⁾。一方のドブジャンスキーは、1900年にウクライナで生まれており、同年齢のチモフェーエフ=レゾーフスキーとは学生時代から親交を築いた。ところが、1927年にアメリカに移住して以降は一度もソ連に帰国することなく、帰化しコロンビア大学を拠点に研究を続け、現地で生涯を閉じた。祖国への最終的な帰属だけを見れば、対照的な結果となったように見える二人であるが、両者ともルイセンコ主義に対する懸念と反発が、海外での長期の研究生活を選択させた点では一致していた。とはいえ、ドブジャンスキーは祖国の同僚の研究環境がルイセンコの支配によって次第に悪化していく様子を傍観していたわけではなく、海外からのルイセンコへの抵抗運動を積極的に指導した⁽⁴⁾。一方のチモフェーエフ=レゾーフスキーは釈放後、ルイセンコ主義からのロシアの生物学の研究教育の正常化に注力した⁽¹⁾⁽²⁾。

彼ら二名が「亡命先」のドイツとアメリカで行った研究には、1920年代のルイセンコ主義出現以前にロシアで確立した遺伝学の研究手法が色濃く影響していることが確認できる⁽³⁾。両者の研究業績は1940年代、ダーウィンの自然選択説とメンデル遺伝学の双方の矛盾を解消した、いわゆる総合学説として結実し、現代生物学史におけるロシアの寄与が刻み込まれた。ここにはソ連由来の科学知が「亡命先」の地に継承され、やがては世界科学へと影響を残すことになったプロセスを鮮やかに確認することができる。

参考文献

(1) グラーニン『ズーブルー偉大な生物学者の伝説』（群像社、1992年）

(2) В.В.Бабков, Е.С.Саканян. «Николай Владимирович Тимофеев-Ресовский». (М.: «Памятники Исторической Мысли», 2002).

(3) 藤岡毅『ルイセンコ主義はなぜ出現したか—生物学の弁証法化の成果と挫折』（学術出版会、2010年）

(4) William deJong-Lambert, *The Cold War Politics of Genetic Research: An Introduction to the Lysenko Affair* (Springer, 2012).

(5) 梶雅範「ウラジーミル・ヴェルナツキーの外国での影響」『化学史研究』44巻（2017）：71-81頁

【選挙管理委員会より】

既にニュースレターでお知らせ申し上げました通り、大会時に行ってきた委員改選選挙は、地方でのハイブリッド大会であることを受け、今回も事前のオンライン選挙となります。

スケジュールとしては、以下を予定しております。

9月25日（月） 投票用紙配信（ニュースレターを郵送で受け取られている方々には郵便で送付）

～10月13日（金） 投票専用のアドレスに投票用紙を送信*

10月14日（土）～10月19日（木） 開票・集計

10月28日（土） 総会で結果をご報告

※二重投票を防止するために、ロシア史研究会のMLに登録されているメールからの送信のみを有効とします。ご注意ください。

また、例年、首都圏での業務や会議の開催を意識して委員をお選びいただいていたかと存じますが、前期より東京に集まることなく、メール審議やオンライン会議でも特に問題なく対応が可能だったことを併せてご報告申し上げます。

【新会員の紹介】

2023年9月1日の新入会員（3名）をお知らせします。

李 暢（2023年9月1日入会）

所属：北海道大学大学院文学院博士後期課程

専攻・テーマ：日露中文化交流からみる19世紀末から20世紀中葉にかけてのハルビンのコスモポリタニズム

ベクトゥルスノフ ミルラン（2023年9月1日入会）

所属：北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター（非常勤研究員）

専攻・テーマ：ソヴィエト・クルグズスタンにおける国家と社会

中井 健太（2023年9月1日入会）

所属：大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻博士前期課程

専攻・テーマ：中央ユーラシア、モンゴル近現代史、ナショリズム、言説史、史学

【ロシア史研究会委員会より】

<ロシア史研究会大会に関して>

大会プログラムならびにその他の大会に関する情報は、ロシア史研究会のウェブサイト (<https://www.roshiashi.com/annual-conference>) に掲載しています。共通論題・パネル・自由論題の報告者のフルペーパーを、10月10日以降このサイトからダウンロードできます。上記サイトにおいて、大会に関する新着の情報、プログラム等の修正・訂正、報告ペーパーの更新を随時行いますので、適宜ご参照ください。

ロシア史研ニューズレター
第131号 2023年9月14日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
(長縄宣博・松本祐生子)
〒558-8585
大阪市住吉区杉本3-3-138
大阪市立大学文学研究科濱本研究室気付
